

コロナ禍における授業・学生生活に関する調査レポート

教学IRプロジェクト

Institutional Research Project

March 2022



はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大により、2020年度以降、遠隔授業の導入や対面授業との併用（ハイブリッドやハイフレックス）等、学生の学びと成長を取り巻く状況・環境が大きく変わりました。多くの大学では、コロナ禍での教育・学習実態を把握するための学生調査が実施され、データに基づくウィズコロナ・ポストコロナの大学教育・

学生支援について議論がなされています。本大学においても、2020年度の春学期以降、学期ごとに学生調査を実施しています。2021年度春学期には教員調査も実施しました。各調査の結果については、全学 IR 推進ワーキンググループや委員会等での報告や授業実施方針への活用等、様々な形で共有し、改善に繋が

てきています。結果の一部については教学 IR プロジェクトの HP に掲載しています。そこでは経年の変化や学年による差異等、全体の傾向を把握することに主眼を置いていますが、今回、調査を積み重ねる中でより重要と思われる視点を抽出し、踏み込んだ分析を行い、その意義や価値を共有するべくレポートを発行する運びとなりました。

調査の概要

これまでに計4回の学生調査を実施していますが、2021年度の秋学期に実施した調査を取り上げます。実施時期は2021年12月6日～2022年1月6日、回答者数（学部学生）は3,737名（13.5%）となります。実施ごとに回答者数が減少してい

ますが（2020年度春学期44.6%、秋学期30.2%、2021年度春学期20.2%）、毎回調査内容を吟味精選し、より効果的なものになるよう設計しているので、最新の調査結果を見ていきたいと思います。今回取り上げる調査項目内容は表1の通

りです。一部の項目については、因子分析（統計的に意味のあるまとまりを作る）等の処理を施しています。全ての項目内容を知りたい場合は、教学 IR プロジェクトの HP に掲載している資料（ダイジェスト版）でご確認下さい。

表 1 分析に使用した主な項目内容

領域	値幅	因子	項目内容（例）
因子分析に基づいて構成した変数			
対面授業の学習行動	1-4	主体的な学び (4)	授業の復習をする、授業で分からなかったことを調べたり、興味をもったことについて学習する
	1-4	受講態度 (4)	授業内容を聞き逃さないようにする、授業に欠席・遅刻しないようにする
	1-4	対話的な学び (2)	友だちと進捗や内容を確認しながら学習する、グループワークやディスカッションで自分の意見を言う
遠隔授業の学習行動	1-4	主体的な学び (3)	授業の復習をする、授業の予習をする
	1-4	受講態度 (4)	視聴方法を工夫して学習する、集中できる環境を整えてから学習する
	1-4	対話的な学び (3)	グループワークやディスカッションで自分の意見を言う、授業で分からなかったことは先生に質問する
コミットメントの欠如	1-5	コミットメントの欠如 (4)	大学の中で自分の居場所がないと感じる、学生生活で打ち込むものがない
学生生活満足度	1-5	学生生活満足度 (5)	授業時間外に他の学生と一緒に勉強したり授業内容の話をしたりすること、キャンパスで大学生らしい生活ができること
単一の項目を用いた変数			
対面授業割合 (%)	0-100	対面授業科目数 / (対面授業科目数 + 遠隔授業科目数)	
フィードバック経験	1-4	秋学期の授業における質問・課題などに対する振り返りやフィードバック	
学びの充実度	1-4	大学における学びの充実度	
成長実感	1-4	大学生活における成長実感	
将来不安	1-5	将来の目標や卒業後の進路について不安を感じる	
気分の落ち込み	1-5	気分が落ち込んだり、一人で悩んだりすることがある	
相談できる学生	1-4	授業や学生生活について情報交換をしたり、相談をし合ったりできる大学の学生	
相談できる教職員	1-4	授業や学生生活について分からないことを尋ねたり、相談したりできる大学の教員や職員	

注) カッコ内の数値は項目数

1. 対面と遠隔の履修割合が学びと成長にどのような影響を与えるか？

今後の大学教育は、対面と遠隔のどちらを選ぶかという二分法ではなく、それぞれの方法が最も効果的に機能する形で選択・実施していくことになります。様々な条件、制約を加味する必要があるため、非常に難しい作業ですが、少しずつ進めていく必要があります。今回の調査では、学生が受講した対面授業と遠隔授業の科目数を聞いており、この数値から対面授業の割合（以下、対面割合）を算出し、分析を行ってみたいと思います。分析の下作業として、対面割合の平均値（58.99）を基に、平均値－1標準偏差（29.23）と平均値＋1標準偏差（88.75）の点を取り、そこから高群（N=724）、中高群（978）、中低群（1125）、低群（590）の4つの群に分けました。そして、この対面割合を独立変数、学びの充実度、成長実感、コミットメントの欠如、

将来不安、気分の落ち込み、学生生活満足度をそれぞれ従属変数とした分散分析を実施したところ、全ての変数において有意差が認められました。多重比較（TukeyのHSD法）を行ったところ、図1のような

結果となりました。総じて、対面授業の割合が高いほど、学びの充実度、成長実感、学生生活満足度の値は高く、コミットメントの欠如、将来不安、気分の落ち込みの値は低いことが見出されました。

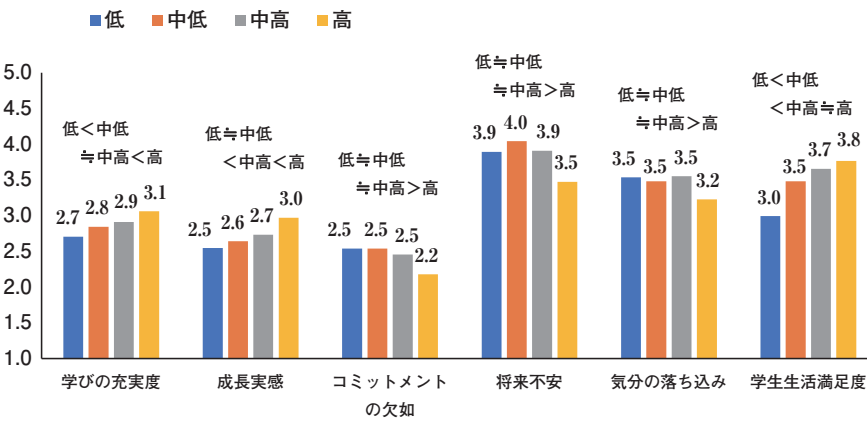


図1 対面割合の違いによる各種得点の差異

2. 対面と遠隔での学習行動が学びと成長にどのような影響を与えるか？

対面授業と遠隔授業それぞれに対する学習行動が、学びの充実度や成長実感到どのような影響を与えているだろうかという点を明らかにするために、対面授業・遠隔授業それぞれの学習行動（各3因子）を独立変数、学びの充実度と成長実感を従属変数とするパス解析を実施しました。すべての独立変数間、従属変数の誤差間に共分散を想定し、有意でなかったパスはモデルから削除し、最終的に図2のモデルが適当と判断しました。具体的な結果として、対面授業におけるすべての学習行動と遠隔授業における対話的な学びが、学びの充実度に有意な正の影響を与えていました。また、対面授業における主体的な学びと対話的な学び、遠隔授業における対話的な学びが成長実感到有意な正の影響を与えていました。

このことから、対面授業における学習行動は学生の学びの充実度や成長実感を高めることにつながっているものの、遠

隔授業においては必ずしも結びついていない、すなわち、一定の学習行動を取っていたとしても、自分が学んでいる、成長しているという実感は遠隔授業下では得られにくいという可能性が窺えます。た

だし、遠隔授業においても対話的な学びに関してはプラスの影響が認められることから、遠隔であっても対話的な要素（双方向性）をいかに担保するかが重要であると言えます。

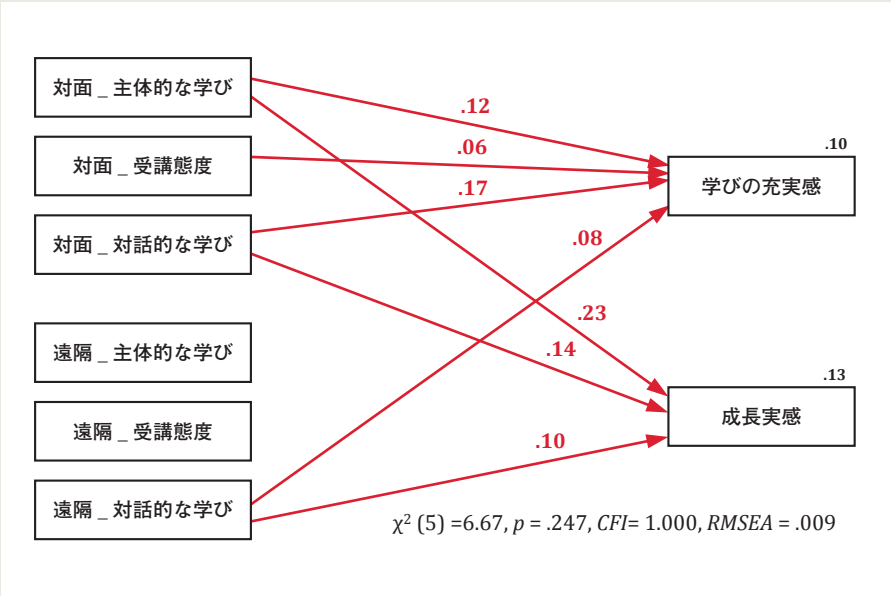


図2 学習行動が学びの充実度、成長実感到与える影響（数値は有意な標準偏回帰係数）

3. フィードバック経験と対面割合が学びの充実度にどのような影響を与えるか？

授業における質問や振り返りに対する教員からのフィードバックの経験と対面割合が、学びの充実度に与える影響について検討するため、フィードバック経験と対面割合、それらの交互作用を独立変数、学びの充実度を従属変数とする分散分析を実施しました。その結果、交互作用が有意となったため、対面割合群ごとにフィードバック経験について多重比較（Tukey の HSD 法）を行ったところ、いずれの対面割合群においてもフィードバック経験の効果は有意でした（図3）。フィードバック経験間の差は、対面割合群ごとに細かな違いはあるものの、対面割合群によらずフィードバック経験が少ないよりも多い方が学びの充実度は高いことが示されました。

対面割合が高いほど学びの充実度は

高いという図1の結果に加えて、対面・遠隔の形態に関わらず、フィードバックの経験（の多さ）が学びの充実度（の高さ）につながるということから、どのような授

業形態を取るにせよ、学生から寄せられた質問や学生から提出されたアウトプット（課題や振り返り等）に対してフィードバックを行うことが重要であると言えます。

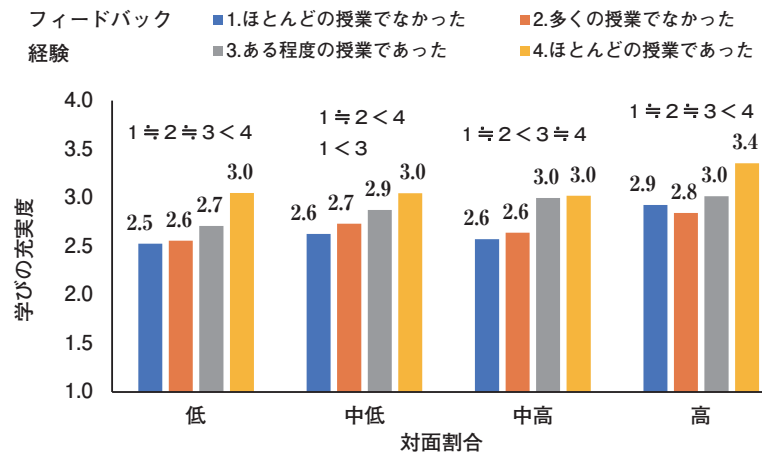


図3 フィードバック経験と対面割合による学びの充実度の差異

4. 授業形態の違いによって学力の三要素の獲得感にどのような違いがあるか？

対面と遠隔（オンデマンド、リアルタイム、教材提示の3種類）の授業形態ごとに、学力の三要素（要素1「知識・技能」、要素2「思考力・判断力・表現力」、要素3「主体性・多様性・協働性」の計8項目）の獲得割合（身に付いたと思われるものを複数選択）にどのような差異が見られるかについて検討を行いました（表2）。色分けした箇所を中心に見ると、知識についてはオンデマンドが対面より若干高いことから、知識の獲得という点においては一定の効果があるように思われます。また、知識と判断力を除く全ての項目で対面が高い割合を示していたことから、現在の学校教育で期待されている多様な力（特に非認知領域）を身に付ける上では対面が効果的であるように思われます。逆に、知識を除く全ての項目で教材提示が低い割合を示していたことから、同じ遠隔といっても効果には幅があり、とりわけ教材提示の効果は相対的に低く、

実施に際しては注意を要すると思われます。最後に、全体平均で見ると、3割を超えている項目が知識と思考力のみ（それ以外は2割以下）となっていることから、

対面・遠隔問わず、多様な力の涵養という観点から授業全体の質向上を図ることが必要だと言えます。

表2 授業形態ごとの学力の三要素の獲得割合

		対面	オンデマンド	リアルタイム	教材提示	平均
要素1	知識	61.8	63.7	50.2	55.3	57.8
要素2	思考力	40.8	38.0	29.9	28.5	34.3
要素1	技能	26.1	19.2	18.4	15.7	19.8
要素3	主体性	25.2	18.0	16.1	12.1	17.9
要素2	判断力	17.3	17.6	17.7	13.9	16.7
要素2	表現力	23.8	14.6	16.0	10.7	16.3
要素3	協働性	35.9	4.8	11.9	3.1	13.9
要素3	多様性	15.6	10.6	8.3	5.9	10.1
	特になし	13.8	12.8	19.0	18.4	16.0

注1 全体平均の高い順に並び替えられている。

注2 オレンジ色は授業形態間で最も高い値を、青色は最も低い値をそれぞれ示す。

5. 相談できる学生・教職員の存在は学生生活満足度にどのような影響を与えるか？

相談できる学生や相談できる教職員の存在が学生生活満足度に与える影響について検討するため、相談できる学生と教職員、それらの交互作用を独立変数、学生生活満足度を従属変数とする分散分析を実施しました。それぞれの要因の主効果のみが有意となり、多重比較（TukeyのHSD法）を行った結果が図4の通りとなります。総じて、学生と教職員のいずれにおいても、相談できる人が多いほど学生生活満足度が高いことが示されました。なお、相談できる学生と教職員ともに一人もいないと回答した学生が224名（全体の6.4%）いること、このタイプの学生は4年生になっても一定数いること、そ

してこのタイプの学生の学生生活満足度はかなり低くなっていることから、授業内で学生同士や教職員・学生間での関わり・つながりを作れるような機会を提供することが必要だと言えます。

り・つながりを作れるような機会を提供することが必要だと言えます。

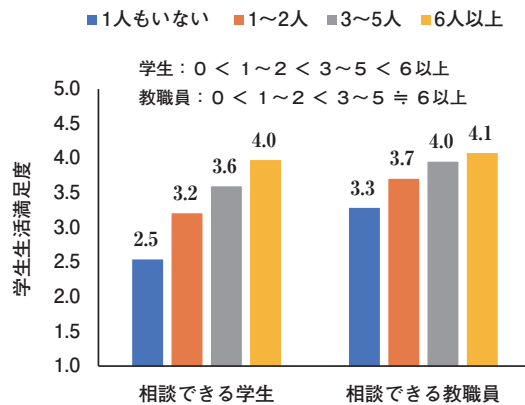


図4 相談できる学生・教職員の存在による学生生活満足度の差異

編集後記

コロナ禍に入って半期ごとに学生調査を実施し、現状を把握し、実践に繋げることを最優先に行ってきました。今回のレポートを通じて、学生同士あるいは学生と教職員とが出会い、繋がり、対話し、関わり合う場としての大学（対面授業を含むキャンパス）の持つ意義や価値を再考する機会になりました。同時に、学生の学びと成長を支え促す機能を拡張させてくれるオンラインの可能性も見出され、総体としての大学のポテンシャルが高まったと感じています。今回のレポートが関係者の方々の参考になれば幸いです。最後に、度重なる調査に協力してくれた学生みなさんに感謝申し上げます。

コロナ禍に入ってから実施された半期ごとの学生調査に対して、これまでも集計と報告を行ってきました。これまでは主として単項目の集計に留まっていたのですが、本レポートでは統計的な分析を用いて、複数の項目間の関連性について種々の観点から検討しました。それによって、大学を取り巻く環境が大きく変化していく中での大学生の姿について新たな知見が得られたのではないかと感じています。今後も大学生の学びや大学の役割について、特定の文脈を超えた知見を見出す分析を進めていきたいと思います。調査に協力してくださった学生みなさん、本当にありがとうございました。

From 事務局

教学IRプロジェクトでは、上述のように、コロナ禍において、①学生の学習状況の実態を把握し、今後の学習・生活環境改善に活用していくこと、②教員の遠隔授業に対する意識や考え、この間の取組や工夫

などを把握し、今後の遠隔授業を含めた授業のあり方について検討すること、を目的に各種アンケート調査を実施してまいりました。

アンケート結果については、ダイジェスト版をWEBページで公開しておりますのでご覧ください。